

読売俳壇

高野ムツ才選

「あれ」「それ」で分かる人亡し西瓜喰ふ

横浜市 鈴木 基之

【評】長年、一緒に暮らし、互いを熟知していなければ、こうした会話は成立しない。その片方が今年から仏壇に祀られている。供養の西瓜の味の何と甘くて切ないことか。

人類はアフリカ生れ鰻喰ふ

埼玉県 小町 季生

【評】人類はアフリカを起源に十数万年前以降に世界中に広がったという。そんな学説を頭に浮かべて深海をルーツとする鰻を食べている。

あっぱっぱ自由な国の民として

青森市 青柳 富也

【評】あっぱっぱは関東大震災後、洋装普及に大きな役割を果たした家庭着。猛暑にも適した。軽くて自由で女性解放の一端とも言われる。

向日葵や回転椅子は宇宙船

館林市 坂口 穰

闇市の火蛾でありしが好々爺

松江市 三方 元

海の日や海は七つじゃなく一つ

長浜市 鹿達 熊夜

ビー玉のからからこりんラムネ飲む

川口市 清正 風葉

ハンカチの皺のひと日を妻に語る

羽生市 岡村 実

風鈴の重なる音の重さかな

日立市 菊池 三夫

潮風にソフトクリームぼたぼたと

狭山市 小俣 友里

正木ゆう子選

たましひは色とりどりにソーダ水

雲南市 熱田 俊月

【評】魂の句は、深くても浅くても難しいものだ。しかし、いっそのこと軽きなら、一周廻って成功ではないだろうか。緑やピンクや青の、透き通った気泡の上がる……そんな魂。生身魂ベジタリアンを論しをり

名古屋市 可知 豊親

【評】理論武装したベジタリアンも、何でも食べて長生きした生身魂には敵わない。(孫)対(祖母)といったところか。ありそうで、可笑しい。

月見草ひらく始終を見てあたり

町田市 枝沢 聖文

【評】細長い葉巻状の蕾がゆっくり解けて、身を振るよくに揺れながら、見る間に開いてゆく。真っ白い四枚の花弁が、真っ平らになるまで。

十五トン運び終へての三尺寝

葛城市 山本 啓

漁船着く頃かと急ぎ髪洗ふ

川越市 大野宥之介

おはぐろの翅を休める魚籠の縁

千葉県 渡部 健

引っ越しを知らぬ人生貝風鈴

岩出市 沢田慎一郎

校長室の記憶仙人掌の花

前橋市 豊嶋啓一朗

鉄を切る火花も見えぬ炎天下

東京都 望月 清彦

引越すカンナの花を置き去りに

仙台市 佐藤 庄陸

小澤 實選

表札に縋る空蟬爪立てて

東海市 斉藤 浩美

【評】さまざまところに空蟬が残されているが、なんと我が家の表札の上にあったという。この表札は木製であることまで想像できる。我が家から旅立った蟬の幸せを祈る。

くきくきと籠一杯の茄子背負ふ

千歳市 鶴谷 雪子

【評】わが畑の茄子が豊作である。摘み取って、籠一杯に詰めて帰る。その茄子どうしが、くきくきと鳴っている。この音がよく実った証。

まっさらな締込み揃え荒神輿

川越市 石田浩二郎

【評】荒神輿の担ぎ手たちがまっさらな締込みをつけて揃った。締込みは下着ではない正式な衣装。気合が入る。全員、怪我のないように。

着陸態勢の窓なる火花かな

大阪市 今井 文雄

早朝の気が好きと生身魂

神戸市 吉野 勝子

輪郭の曖昧になる暑さかな

宝塚市 武田 優子

髪洗ふ夜はエーゲ海クルーズに

横浜市 藤井 みき

遠花火蕪村の生れしあの辺り

京都市 吉田 基子

蜻蛉の翅きらめける朝かな

松戸市 和田 薫光

長き尾に青さ残してとかげかな

東松山市 小川 月子